

トルコ為替週報

2022年5月17日 | みずほ銀行欧州資金部

<過去1週間の動き>

(5月10日～5月16日)

USD/TRY: 15.1200～15.6605

TRY/JPY: 8.25～8.61 (参照値)

過去1週間のトルコ・リラ相場は、一方的な下落。その値幅(対ドルで3.5%弱)は、昨年末/今年初めの乱高下と比較すれば小幅と言えたが、昨年末以前のそれと比較すれば相応に大幅と言えた。3月失業率の上昇や同経常赤字の拡大などトルコ経済指標の悪化がリラ売りを誘った様子は確かに読み取れたが、他に、ここまで一方的なリラ売りを誘うような特段の新規材料は見当たらなかった。経常赤字は市場予想を僅かに上振れた(赤字が小さかった)ものの、前月分の数字がそれ以上に下方修正された上、5ヵ月連続の赤字、前年同月比67%の赤字幅拡大など、様々な角度から失望を誘う数字と言えた。12日に掛けては、トルコ国営銀行による大規模なリラ買い(実質的な為替介入)が観測された(後述)が、リラ安は止まらなかった。並行して、トルコ国債の下落(トルコ国債市場の流動性は乏しい模様で、正確にはスワップ金利の上昇)、トルコ現地株価指数の下落も進み、この間、トルコ金融資産市場はトリプル安となった。他に、トルコ発のニュースでは、ネバティ財務相が地場製造業/小売業者などを集めて実施した会談で、一時的な価格据え置きを要請したという報(12日)や、トルコ中銀がその貸し出しオペの適格担保要件を各種リラ建証券に拡大する一方、外貨建担保の割引率を従来の5%から15%に引き上げたとの発表(16日)などが目を引いたものの、リラの値動きにどこまで影響したかは定かでなかった。後者は、地場金融機関のリラ建証券保有を促進し、外貨建証券保有を抑止するのが狙いで、確かに、前後してリラは小反発を見せたが、リラ安の流れを転換させるほどの要因とは思われなかった。

<過去1週間に発表された主要経済指標等>

月日	GMT	指標	期間	発表	予想*	前回
5/10	7:00	失業率	3月	11.5%		11.1%r
5/13	7:00	鉱工業生産(前年比)	3月	+9.6%		+13.3%
	7:00	小売売上高(前年比)	3月	+2.5%		+6.5%r
5/16	7:00	経常収支(USD)	3月	-5.55bn	-5.70bn	-5.44bnr
	8:00	財政収支(TRY)	4月	-50.2bn	-69.0bn	

(*予想はブルームバーグ社予想中心値)

<向こう1週間の見通し>

(5月17日～5月23日)

USD/TRY: 15.400～15.800

TRY/JPY: 7.15～8.45

向こう1週間のトルコ・リラ相場は、続落を予想。12日に掛けての国営銀行によるリラ買い(実質的な為替介入)は、6営業日で50億ドル規模に上ったと観測された。あくまでも市場筋からの観測に過ぎないが、実態から大きく乖離している可能性は低いだろう。トルコ当局が必死にリラ買い支えに動いている背景には、為替差損補填リラ建預金の損失補填との関係もあろう。16日に発表されたトルコ中央政府の財政収支によると、同預金の損失補填のために、トルコ政府は、3月の117億リラに続いて、4月にも46億リラの歳出を計上したという。同預金スキームは、政府が提供するものと、トルコ中銀が提供するものと2種類あるはずで、トルコ中銀も、おそらく、並行して似たような損失を計上している可能性が高い。リラ安が進めば進むほどトルコ政府/トルコ中銀の、(歳入の裏付けのない)出費が拡大するわけで、なけなしの外貨準備を投入してでも、リラ下落を食い止めたい心理はわかる。1月央～2月央に組成された同預金の換算レート(トルコ中銀の対ドル売り公示レート)は13.5前後だったはずで、同水準からドルの14%高は15.4前後になることから、15.4が、歳出が決定的に膨らむ心理的な防衛水準であった可能性も考えられただろう。価格据え置きの「お願い」や、担保要件の更新など、物価抑制/リラ安抑止に向けたトルコ当局の努力は涙ぐましいが、もはや、そうした枝葉末節の努力で、多少なりとも足元の流れが食い止められるような段階は過去のものであるように思われる。

<向こう1週間に発表予定の主要経済指標等>